

牛をつないだ椿の木

新美

南吉

たのであります。

ふたりはかわりばんこに、泉のふちの、しだやぜんまいの上に両手をつき、腹ばいになり、つめたい水のおいをかきながら、鹿のように水をのみました。はらの中が、ごぼごぼいうほどのみました。

山の中では、もう春蝉が鳴いていました。

「ああ、あれがもう鳴き出したな。あれをきくと暑くなるて」

と、海蔵さんが、まんじゅう笠をかぶりながらいいました。

「これからまたこの清水を、ゆききのたんびに飲ませてもらうことだて」

と、利助さんは、水をのんで汗が出たので、手ぬぐいでふきふきいいました。

「もうちと、道に近いとええがのオ」

と海蔵さんがいいました。

「まったくだて」

山の中の道のかたわらに、椿の若木がありました。牛ひきの利助さんは、それに牛をつなぎました。

人力ひきの海蔵さんも、椿の根本へ人力車をおきました。人力車は牛ではないから、つないでおかなくともよかったです。

そこで、利助さんと海蔵さんは、水をのみに山の中にはいってゆきました。道から一町ばかり山にわけいったところに、清くてつめたい清水がいつもわいてい

と、利助さんが答えました。ここの水をのんだあとでは、だれでもそんなことをあいさつのようにいいあうのがつねでした。

ふたりが椿つばきのところへもどつてくると、そこに自転車をとめて、ひとりの男の人が立っていました。そのころは自転車が日本にはいつてきたばかりのじぶんで、自転車を持っている人は、田舎いなかでは旦那衆だんなしゆうにきまっていました。

「だれだろう」

と、利助さんが、おどおどしていいました。

「区長さんかも知れん」

と、海蔵さんがいいました。そばにきてみると、それはこの付近の土地を持っている、町の年とった地主じゆしであることがわかりました。そして、も一つわかったことは、地主がかんかんにおこっていることでした。

「やいやい、この牛はだれの牛だ」

と、地主はふたりをみると、どなりつけました。その

牛は利助りすけさんの牛でありました。

「わしの牛だがい」

「てめえの牛？これをみよ。椿つばきの葉をみなくつてすっかり坊主ぼんずにしてしまったに」

ふたりが、牛をつないだ椿の木をみると、それは自転車をもった地主がいったとおりでありました。若い椿つばきの、柔らかい葉はすっかりむしりとられて、みすばらしい杖つえのようなものが立っていただけでした。

利助さんは、とんだことになったと思つて、顔をまつかにしながら、あわてて木から綱つなをときました。そして申しわけに、牛の首くびったまを、手綱たづなでびしりと打ちました。

しかし、そんなことぐらいでは、地主はゆるしてくれませんでした。地主はおとなの利助さんを、まるで子どもをしかるように、さんざんしっかりとばしました。そして自転車のサドルをパンパンたたきながら、こういいました。

「さあ、なんでもかんでも、もとのように葉をつけてしめせ」

これは無理なことでありました。そこで人力ひきの海蔵さんも、まんじゅう笠をぬいで、利助さんのためにあやまつてやりました。

「まあまあ、こんどだけはかにしてやっつくんやす。利助さんも、まさか牛が椿をくつてしまふとは知らずにつないだことだ」

そこでようやく地主は、はらのむしがおさまりました。けれど、あんまりどなりちらしたので、体がふるるとみえて、二三べん自転車にのりそこね、それからうまくのつて、いつてしまいました。

利助さんと海蔵さんは、村の方へ歩きだしました。けれどもう話をしませんでした。おとながおとなにばかりとばされるといふのは、情ないことだろうと、人力ひきの海蔵さんは、利助さんの気持ちをくんでやりました。

「もうちつと、あの清水が道に近いとええだがのオ」と、とうとう海蔵さんがいいました。

「まったくだて」
と、利助さんが答えました。

二

海蔵さんが人力ひきのたまり場へくると、井戸掘りの新五郎さんがいました。人力ひきのたまり場といっても、村の街道にそった駄菓子屋のことでありました。そこで井戸掘りの新五郎さんは、油菓子をかじりながら、つまらぬ話を大きな声でしていました。井戸の底から、外にいる人にむかって話をするために、井戸新さんの声が大きくなつてしまつたのであります。

「井戸つてもなア、いったいいくらでほれるもんかい、井戸新さ」

と、海蔵さんは、じぶんも駄菓子箱から油菓子を一本つまみだしながらききました。

井戸新さんは、人足がいくらいくら、井戸囲の土管がいくらいくら、土管のつぎめをうめるセメントがいくらと、こまかく説明して、

「まず、ふつうの井戸なら、三十円もあればできるな」と、いいました。

「ほ才、三十円な」

と、海蔵さんは、眼をまるくしました。それからしばらく、油菓子をぼりぼりかじっていました。

「しんたのむねを下りたところにほったら、水が出るだろうかなア」

と、ききました。それは利助さんが牛をつないだ樁の木のあたりのことでありました。

「うん、あそこなら、出ようて、前の山で清水がわくくらいだから、あの下なら水は出ようが、あんなところへ井戸をほって何にするや」

と、井戸新さんがききました。

「うん、ちつとわけがあるだて」

と、答えたきり、海蔵さんはそのわけをいいませんでした。

海蔵さんは、からの人力車をひきながら家に帰ってゆくとき、

「三十円な。……三十円か」

と、何度もつぶやいたのでありました。

海蔵さんは藪をうしろにした小さい藁屋に、年とつたお母さんとふたりきりで住んでいました。ふたりは百姓仕事をし、ひまなときには海蔵さんが、人力車をひきに出っていたのであります。

夕飯のときにふたりは、その日にあつたことを話しかうのが、たのしみでありました。年とつたお母さんは隣の鶏が今日はじめで卵をうんだが、それはおかしいくらい小さかったこと、背戸の柵の木に蜂が巣をかけるつもりか、昨日も今日も様子をみにきた

が、あんなところに蜂の巣をかけられては、味噌部屋へ味噌をとりに行くときにあぶなくてしょうがないということをお話しました。

海蔵さんは、水のみについているあいだに利助さんの牛が椿の葉をくってしまったことを話して、「あそここの道ばたに井戸があったら、いいだろにのオ」と、いいました。

「そりゃ、道ばたにあつたら、みんながたすかると、いって、お母さんは、あの道の暑い日ざかりに通る人びとをかぞえあげました。大野の町から車をひいてくる油売り、半田の町から大野の町へ通る飛脚屋、村から半田の町へかけてゆく羅宇屋の富さん、そのほかたくさんの荷馬車ひき、牛車ひき、人力ひき、遍路さん、乞食、学校生徒などをかぞえあげました。これらの人ののがちようどしんたのむねあたりでかわかぬわけにはいきません。

」だで、道のわきに井戸があつたら、どんなにかみんな

ながたすかる」

と、お母さんは話をむすびました。

三十円くらいで、その井戸がほれるということをお話しました。

「うちのようない貧乏人にゃ、三十円といや大した金で眼がまうが、利助さんとこのような成金にとつちや、三十円ばかりはなんでもあるまい」

と、お母さんはいいました。海蔵さんは、せんだつて利助さんが、山林でたいそうなお金を儲けたそうなきいたことをおもいだしました。

ひと風呂あびてから、海蔵さんは牛車ひきの利助さんの家へ出かけました。

うしろ山で、ほオほオと梟が鳴いていて、崖の上の仁左衛門さんの家では、念佛講があるのか、障子にあかりがさし、木魚の音が、崖の下のみちまでこぼれていました。もう夜でありました。いってみると、働きの利助さんは、まだ牛小屋の中のくらやみで、ご

そごそと何かしていました。

「えらい精が出るのオ」

と、海蔵さんがいいました。

「なに、あれから二へん半田まで通つてのオ、ちよつとおくれただてや」

といいながら、牛の腹の下をくぐって利助さんが出てきました。

ふたりが縁ばなに腰をかけると、海蔵さんが、
「なに、きょうのしんたのむねのことだがのオ」

と、話しはじめました。

「あの道ばたに井戸を一つほつたら、みんながたすか
ると思うがのオ」

と、海蔵さんがもちかけました。

「そりゃ、たすかるのオ」

と、利助さんがうけました。

「牛が椿の葉をくつつちまうまで知らんどつたのは、
清水が道から遠すぎるからだのオ」

「そりゃ、そうだのオ」

「三十円ありゃ、あそこに井戸がひとつほれるだの
オ」

「ほオ、三十円のオ」

「ああ、三十円ありゃええだけな」

「三十円ありゃのオ」

こんなふうにいっていても、いっこう利助さんが、
こちらの心をくみとってくれないので、海蔵さんは、
はつきりいつてみました。

「それだけ、利助さ、ふんぱつしてくれないかエ。き
けば、お前、だいぶ山林でもうかつたそうだが」

利助さんは、いままで調子よくしゃべっていました
が、きゆうにだまってしまいました。そして、じぶん
のほっぺたをつねっていました。

「どうだエ、利助さ」

と、海蔵さんは、しばらくして答えをうながしました。
それでも利助さんは、岩のようにだまっていました。

どうやら、こんな話は利助さんにはおもしろくなさそうでした。

「三十円で、できるげなのオ」
と、また海蔵さんがいいました。

「その三十円をどうしておれが出すのかエ。おれだけがその水をのむなら話がわかるが、ほかのもんもみんなのむ井戸に、どうしておれが金をだすのか、そこがおれにはよくのみこめんがのオ」
と、やがて利助さんはいいました。

海蔵さんは、人びとのためだということを、いろいろとききましたが、どうしても利助さんには「のみこめ」ませんでした。しまいには利助さんは、もうこんな話はいやだというように、

「おかか、めしのしたくしろよ。おれ、腹がへつとるで」
と、家の中へむかってどなりました。

海蔵さんは腰をあげました。利助さんが、夜おそく

までせつせと働くのは、じぶんだけのためだということがよくわかったのです。

ひとり夜みちを歩きながら、海蔵さんは思いました。——こりや、ひとにたよっていちゃだめだ、じぶんの力でしなけりや、と。

三

旅の人や、町へゆく人は、しんたのむねの下の櫓の木に、賽銭箱のようなものがつるされてあるのを見ました。それには札がついていて、こう書いてありました。

「ここに井戸をほって旅の人にのんでもらおうと思えます。志のある方は一銭でも五厘でも喜捨してください」

これは海蔵さんのしわざでありました。それがしよ

うこに、それから五六日のち、海蔵さんは、椿の木
に向かいあつた崖の上にはらばいになって、えにしだ
の下から首つたまだけ出し、人びとの喜捨のしよを
みていました。

やがて半田の町の方からおばあさんがひとり、乳母
車をおしてきました。花を売って帰るところでしよ
う。おばあさんは箱に目をとめて、しばらく札をなが
めていました。しかし、おばあさんは字を読んだので
はなかつたのです。なぜなら、こんなひとりごとをい
いました。

「地藏さんも何もないのに、なんでこんなとこに
寶銭箱があるのじゃろ」そしておばあさんはいつてし
まいました。

海蔵さんは、右手にのせていたあごを、左手にのせ
かえました。

こんどは村の方から、しりはしよりした、がにまた
のおじいさんがやってきました。「庄平さんのじいさ

んだ。あのじいさんはむかしの人間でも、字が読める
はずだ」と、海蔵さんはつぶやきました。

おじいさんは箱に眼をとめました。そして「なにな
に」といいながら、腰をのばして札を読みはじめまし
た。読んでしまうと、「なアるほど、ふふウン、なア
るほど」と、ひどく感心しました。そして、ふところ
の中をさぐりだしたので、これは喜捨してくれるなど
思っていると、とり出したのは古くさいたばこ入れで
した。おじいさんは椿の根もとでいっぶくすつてい
ってしまいました。

海蔵さんは起きあがって、椿の木の方へすべりお
りました。

箱を手にとつて、ふってみました。なんの手ごたえ
もないのでした。

がっかりして海蔵さんは、ふうツと、といきをもら
しました。

「けつきよく、ひとはたよりにならんとわかった。い

よいよこうなったら、おれひとりの力でやりとげるのだ」といいながら、海蔵さんは、しんたのむねをのぼっていきました。

四

つぎの日、大野の町へ客を送ってきた海蔵さんが、村の茶店にはいつていきました。そこは、村の人力ひきたちが一仕事してくると、つぎのお客を待ちながら、やすんでいる場所になっていたのです。その日も、海蔵さんよりさきに三人の人力ひきが、茶店の中にやすんでいました。

店にはいつてきた海蔵さんは、いつものように、駄菓子箱のならんだ台のうしろにあおむけにねころがってうっかり油菓子をひとつつまんでしまいました。人力ひきたちは、お客を待っているあいだ、すること

がないので、つい、駄菓子箱のふたをあけて、油菓子や、げんこつや、ぺこしゃんという飴や、やきするめや飴つぼなどをつまむのが癖になっていました。海蔵さんもまたそうでした。

しかし海蔵さんは、いま、つまんだ油菓子をまたもとの箱に入れてしまいました。

みていた仲間の源さんが

「どうしたただや、海蔵さ。あの油菓子は鼠の小便でもかかっておるだかや」といいました。

海蔵さんは顔をあかくしながら、

「ううん、そういうわけじゃねえけれど、きょうはあまりたべたくないだがや」と、答えました。

「へへエ。いつこう顔色もわるくないようだが、それでどこかわるいだかや」と、源さんがいいました。

しばらくして源さんは、ガラスつぼから金平糖をつかみとり出すと、そのうちの一つをぽおいと上に投げあげ、口でぱくりとうけとめました。そして、

「どうだや、海蔵さ。これをやらんかや」

といいました。海蔵さんは、昨日まではよく源さんと、それをやったものでした。ふたりで競争をやつて、うけそこなった数のすくないものが、相手に別の菓子を買わせたりしたものでした。

そして海蔵さんは、この芸当ではほかのどの人力ひきにも負けませんでした。

しかし、きょうは海蔵さんはいいました。

「朝から奥歯がやめやがってな、甘いものはたべられんのだてや」

「そうかや、そいじゃ、由さ、やろう」

といって、源さんは由さんと、それをはじめました。

ふたりは色とりどりの金平糖を、天井に向かつて投げあげてはそれを口でとめようとしたましたが、うま

く口にはいるときもあれば、鼻にあたったたり、たばこぼんの灰の中にはいたりすることもありました。

海蔵さんは、じぶんがするなら、ひとつもそらしはしないのだがなあ、と思いながらみていました。あまり源さんと由さんが落としてばかりいると、「よし、おれがひとつやつてみせてやろかい」といつて出たくなるのですが、それをがまんしていました。これはたいへんつらいことでありました。

はやく、お客がくればいいのになあ、と海蔵さんは10眼をほそめて明るい道の方をみていました。しかしお客よりさきに、茶店のおかみさんが、やきたてのほかの大餡巻をつくってあらわれました。

人力ひきたちは、大よろこびで、一本ずつとりました。海蔵さんもがまんできなくなって、手がすこしうごきだしましたが、やつのことでおさえました。

「海蔵さ、どうしたじゃ。一銭もつかわんで、ごっそりためておいて、大きな倉でもたてるつもりかや」

と、源さんがいいました。

海蔵さんは苦しそうに笑って、外へ出てゆきました。そして、溝のふちで、かやつり草をおって、蛙をつっていました。

海蔵さんの胸の中には、げんこつのようにかたい決心があったのです。いままでお菓子につかったお金を、これからは使わずにためておいて、しんたのむねの下に、人びとのための井戸をほろうというのでありました。

海蔵さんは、腹も齒もいたくありませんでした。のどから手が出るほど、お菓子はたべたかったのです。しかし、井戸をつくるために、いままでの習慣をあらためたのでありました。

五

それから二年たちました。

牛が葉をたべてしまった椿にも、花が三つ四つさいたじぶんのある日、海蔵さんは半田の町に住んでいる地主の家へやっていきました。

海蔵さんは、もうニヶ月ほどまえから、たびたびこの家へきたのです。井戸をほるお金はだいたいできたのですが、いざとなって地主が、そこに井戸をほることをしようちしてくれないので、何度もたのみにきたのです。その地主というのは、牛を椿につないだ利助さんを、さんざんしかつたあの老人だったのです。

海蔵さんが門をはいったとき、家の中から、ひえっというひどいしゃっくりの音がきこえてきました。

たずねてみると、「昨日から地主の老人は、しゃっくりがとまらないので、すっかり体がよわって、床についているということでした。それで、海蔵さんはお見舞いに枕もとまできました。

老人は、ふとんを波うたせて、しゃつくりをしていました。そして、海蔵さんの顔をみると、

「いや、何度お前がたのみにきても、わしは井戸をほらせん。しゃつくりがもうあと一日つづくと、わしが死ぬそうだが、死んでもそいつはゆるさぬ」

と、がんこにいいました。

海蔵さんは、こんな死にかかった人と争ってもしかたがないと思って、しゃつくりにきくおまじないは、茶わんにはしを一本のせておいて、ひといきに水をのんでしまうことだと教えてやりました。

門を出ようとすると、老人の息子さんが、海蔵さんのあとを追ってきて、

「うちの親父は、がんこでしょうがないのですよ。そのうち、私の代になりますから、そしたら私があなたの井戸をほることを承知してあげましょう」といいました。

海蔵さんは喜びました。あの様子では、もうあの老

人は、あと二三日で死ぬにちがいない。そうすれば、あの息子があとをついで、井戸をほらせてくれる、これはうまいと思いました。

その夜、夕飯のとき、海蔵さんは年とったお母さんに、こう話しました。

「あのがんこ者の親父が死ねば、息子が井戸をほらせてくれるそうだがのオ。だが、ありゃ、もう二三日で死ぬからええて」

すると、お母さんはいいました。

「お前は、じぶんの仕事のことばかり考えていて、わるい心になっただな。人の死ぬのを待ちのぞんでいるのはわるいことだぞや」

海蔵さんは、とむねをつかれたような気がしました。お母さんのいうとおりだったのです。

つぎの朝早く、海蔵さんは、また地主の家へ出かけていきました。門をはいると、昨日より力のない、ひきつるようなしゃつくりの声が聞こえてきました。だ

いぶ地主の体が弱ったことがわかりました。

「あなたは、またきましたね。親父はまだ生きていますよ」

と、出てきた息子さんがいきました。

「いえ、わしは、親父さんが生きておいでのうちに、ぜひおあいしたいので」

と、海蔵さんはいいました。

老人はやつれてねていました。海蔵さんは枕もとに両手をつけて、

「わしは、あやまりにまいりました。昨日、わしはここから帰るとき、息子さんから、あなたが死ねば息子さんが井戸をゆるしてくれるときいて、わるい心になりました。もうじき、あなたが死ぬからいいなどと、おそろしいことを平気で思っていました。つまり、わしはじぶんの井戸のことばかり考えて、あなたの死ぬことを待ちねがうというような、鬼にもひどい心になりました。そこで、わしは、あやまりにまいりまし

た。井戸のことは、もうお願いしません。またどこかほかの場所をさがすとします。ですから、あなたはどうぞ、死なないでください」

と、いいました。

老人はだまってきいていました。それから長いあいだだまって海蔵さんの顔を見上げていました。

「お前さんは、感心なおひとじゃ」

と、老人はやつと口をきっていました。

「お前さんは、心のええおひとじゃ、わしは長い生涯じぶんの欲ばかりで、ひとのことなどちつとも思わずに生きてきたが、いまはじめてお前さんのりっぱな心にうごかされた。お前さんのような人は、いまどきめずらしい。それじゃ、あそこへ井戸をほらしてあげよう。どんな井戸でもほりなさい。もしほって水が出なかったら、どこにでもお前さんのすきなところにほらしてあげよう。あのへんは、みな、わしの土地だから。うん、そうして、井戸をほる費用がたりなか

ったら、いくらでもわしが出してあげよう。わしは明日にも死ぬかも知れんから、このことを遺言しておいてあげよう」

海蔵さんは、思いがけないことばをきいて、返事のしようもありませんでした。だが、死ぬまえに、このひとりの欲ばりの老人が、よい心になったのは、海蔵さんにもうれしいことでありました。

六

しんたのむねから打ちあげられて、すこしくもった空で花火がはじけたのは、春も末に近いころの昼でした。

村の方から行列が、しんたのむねをおりてきました。行列の先頭には黒い服、黒と黄の帽子をかむった兵士がひとりいました。それが海蔵さんでありました。

しんたのむねをおりたところに、かたがわには椿の木がありました。いま花はちつて、浅緑の柔らかな若葉になっていました。もういつぼうには、崖をすこしえぐりつつ、そこに新しい井戸ができていました。

そこまでくると、行列がとまってしまいました。先頭の海蔵さんがとまったからです。学校かえりの小さい子どもがふたり、井戸から水をくんで、のどをならしながら、美しい水をのんでいました。海蔵さんは、それをにこにこしながらみていました。

「おれも、いっぱいのもんでいこうか」

子どもたちがすむと、海蔵さんはそういつて、井戸のところへいきました。

中をのぞくと、新しい井戸に、新しい清水がゆたかにわいていました。ちょうど、そのように、海蔵さんの心の中にも、よろこびがわいていました。

海蔵さんは、くんでうまそうにのみました。

「わしはもう、思いのこすことはないがや。こんな小

さな仕事だが、人のためになることをのこすことができ

きたからのオ」

と、海蔵さんはだれでも、とっつかまえていきたい気持ちでした。しかし、そんなことはいわないで、ただにこにこしながら、町の方へ坂をのぼっていきましました。

日本とロシアが、海の向こうでたたかいはじめていました。海蔵さんは海をわたって、そのたたかいの中にはいっていくのであります。

七

ついに海蔵さんは、帰ってきませんでした。勇ましく日露戦争の花とちったのです。しかし、海蔵さんのしのことした仕事は、いまでも生きています。椿の木かげに清水はいまもこんこんとわき、道につかれた人びとは、のどをうるおして元気をとりもどし、また道

をすすんでいくのであります。

「牛をつないだ椿の木」

※『新装版 新美南吉童話集3 花のき村と盗人たち』（2012年12月1日、大日本図書株式会社）の「牛をつないだ椿の木」をもとに一部、漢字表示とルビを編集しました。